

アンケート調査から 人の感情を調べる「SD法」

牧野 浩二

一般に感情を扱うとなると、脳波を調べることを思いつくかもしれませんが、ここではアンケート調査から感情や感覚を調べる「SD法」と呼ばれる手法を紹介します。具体的には筆者が作成した架空のアンケート調査の結果をSD法で分析してみます。また、Excelを用いてSD法の分析で役立つグラフの作成方法についても併せて紹介します。

アンケート調査「SD法」のあらまし

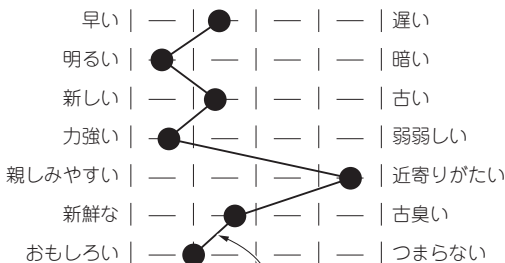
● 位置づけ

SD法はたくさんの感情(感覚)を抽出する手法です。

● 50年以上前から存在した

アンケート調査から人の感情や感覚を調べることを行います。人の感情や感覚は個々で異なるため、調べることは困難と思われるかもしれませんが、しかし、SD法と呼ばれる手法を用いれば調べることが可能です。例えばブランド・イメージや商品の印象などを知ることができます。

SDとは、Semantic Differentialの頭文字をとったもので、日本語では「意味差別法」や「意味微分法」と訳されます。これは、1952年にOsgood氏が提唱したと言われています。



グラフの形から感性のイメージを捉える

図1 アンケート調査から人の感情を調べるSD法の集計結果の表し方

● SD法が使われている場面

内閣府の調査では次の項目で使われていました。

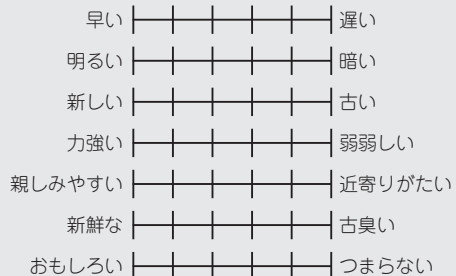
- 幸福度に関するインターネット調査報告書(1)の「将来期待に関する意識の志向性」に関する調査
内閣府の調査ではあまり使われていないのですが、次のようなさまざまな研究の分析で使われています。
- 都市の建築外部空間を構成する緑地のもたらす生理・心理的效果⁽²⁾
- 身体動作インターフェースを利用した電動車椅子の操作⁽³⁾
- 色、香り、音楽に共通する印象次元の検討⁽⁴⁾
- 教育支援ロボットにおける身体動作と表情変化による共感表出法の印象効果⁽⁵⁾

アンケート調査をSD法で分析

● SD法で使うアンケート形式…形容詞対を用いる

アンケート形式はシンプルです。「早い—遅い」、「明るい—暗い」、「新しい—古い」などと対立する形容詞の対を用いて、商品や銘柄などの与える感情的なイメージを、5段階あるいは7段階で選ぶ方法です。

例えば、人工知能のイメージ調査を行う場合を想定したときのアンケートの一部を次に示します。



アンケート調査では、この縦棒に○(丸印)を付けてもらいます。SD法では、一見関係なさそうな言葉も含ませることで、思わぬ結果を得られることもあります。そして、集まったアンケートを集計して図1のようなグラフを作り、その形からアンケート回答者の感情や感覚のイメージを捉えることを行います。